

三井のリフォーム住生活研究所長 西田 恭子

団塊世代の終の住処

団塊世代の今後のライフスタイルと住まいに関する調査が、各機関や研究所で行われて数年がたった。

日本をけん引し、ニューファミリーと呼ばれるきた世代が、今はファミリーというよりも夫婦のセカンドライフを模索している。ファミリーから夫婦二人となり、このまま同じところに住み続けるのか？ 住み替えを考えるのか？ 迷うところである。

長年住み慣れた地域より、兄弟などの親族の近くに住みたいと考える人もいる。しかし、そんな話を聞いていると、「こっちに来なさいよ！」という呼び寄せラプコールが多く、「私たちの方が、そちらに行くわ」という人は少ない。

だが長年の夢の実現をするのは今しかない、熱い情熱を掲げて、住み替えを念頭にリフォームを計画する人もいる。家の建て替えは、引越しや仮住まいもあり、大変だと言われていることから考えると、住み替えて、さらに家を作り直すためのエネルギーは大変なものだ。

このパワーはどこから来

るのだろうか？

どうやら本当は考えたくもない「在宅介護」や「施設入所」という、将来の可能性について考えるから、このパワーが生まれるようだ。可能性という和前向きで夢があるが、選択を迫られる時がくるというのは、厳しく現実的だ。結果的にこの難題に取り組むには、元氣な今のうちにするしかないと思うからようだ。

今までの暮らしの中でも、家はお仕着せではなかった。大きい小さいは別として、住まいは自分たちで選択し、確保してきたことが身についている人が多い団塊世代だ。六〇代のうちに、情報を集めて行動することの大切さも自覚しているだろう。

ところが、これは実際には自分たちだけで考えても進まない。子どもとの関わりをどうするのか？ 子供に遺すものをどう考えるのか？ やっかいなことに、あやふやだから円満にいつているかもしれないことを、はっきりとさせないと進まないのだ。二世帯住宅あるいは近居するときの費用負担の割合をどうするの

か？ 高齢者施設入所の場合は貯金と年金で賄えるのか？ 持ち家処分も費用にあてるのか？ 子供には期待していないとおっしゃる独立シニアが多いが、子供を交えた総資産再確認なしでは、いろいろなことが踏み切れない場合が多い。

久しぶりに会った同世代の友人との会話の内容は、介護と年金とお墓の話ばかりだったという人がいた。そんな会話の後には、気持ちが縮小気味になり、家には一切もう費用をかけないという気になるという。

また逆に、残された時間を存分に楽しむためならと、こだわってリフォームされる人もいる。

終の住処は今までの人生の集大成として、自然に決まるものだと思うが、一族として考えるのか、家族として考えるのか、あるいは夫婦単位で考えるのか、なかなか悩ましい。

さらには単身になったときの想定まで必要だ。女性の長い平均寿命を考えると、女性から仕掛けていかないと、終の住処については、進まない話も多い気がする。



西田恭子氏のプロフィール「一級建築士。「三井のリフォーム」で設計を手かけ二五年。暮らしの創造に貢献する「三井のリフォーム 住生活研究所」の所長に就任。新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。日本女子大学非常勤講師。(株)日本建築家協会正会員。